

総社市埋蔵文化財調査年報 3

(平成 4 年度)

1994年3月

総社市教育委員会

序

わたしたちのまち総社市は、昭和29年3月31日に市制施行し、本年は40周年を迎えようとしています。

発足当時36,968人であった人口は、岡山・倉敷両市のベッドタウンとして、また県南の内陸工業都市としての発展を受けて漸増し、平成5年12月1日には55,875人を数えるに至りました。

しかし、古代吉備の中枢地として栄えた本市には数多くの埋蔵文化財があり、こうした発展に伴う開発事業との調整は、大きな課題となっています。

特に近年は大型の開発事業が多く、発掘調査に忙殺される状況にあります。そのため整理作業は遅々として進まず、報告書の刊行も思うにまかせない状態となっています。そこで平成3年度から、前年度調査の概要を報告するため、埋蔵文化財調査年報を刊行しています。

本書はその3冊目にあたります。ささやかな小冊子ですが、文化財行政の一助になれば幸いです。

おわりに、御指導、御協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも一層の御力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月

総社市教育委員会
教育長 浅 沼 力

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成4年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び確認・立会調査について、その概要もしくは報告をまとめたものである。
2. 調査の体制

教育長	浅沼 力	主事	武田 恭彰（調査担当）
教育次長	秋田 皓二	“	前角 和夫（調査担当）
社会教育課課長	平田 定士	“	高橋 進一（調査担当）
社会教育課主幹	村上 幸雄（調整担当）		
文化係長	森田 忠志（庶務担当）		
主任	荒木 泰行（庶務担当）		
	“ 谷山 雅彦（調査担当）		
	“ 高田 明人（調査担当）		
3. 本書の作成は、それぞれの調査概要を各調査担当者が分担執筆し、それを編集したものである。文末に担当者を記し、文責とする。執筆は文化係職員谷山雅彦・高田明人・武田恭彰・前角和夫・高橋進一が行い、編集は執筆者の原稿のまま全体編集を高橋が行った。
4. 本書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
5. 遺物整理にあたって西平登代子（社会教育課服部収蔵庫）の協力を得た。
6. 本書に関係する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文 例 言

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要	
平成4年度 文化財行政の概要	1
2. 確認および立会調査概要	
新本幼稚園園舎改築に伴う確認調査	5
水島機械金属工業団地協同組合西団地の拡張に伴う遺跡分布調査	7
カルビス食品工業㈱岡山工場増築に伴う確認調査	10
共同住宅建設に伴う立会調査	11
砂川流域における遺跡分布調査－その1－	12
マンホール設置に伴う立会調査	15
(仮称)埋文学習の館造成に伴う確認調査	16
奥板地内出土の須恵器	18
衆幼稚園建設に伴う確認調査	20
窪木排水路改良工事に伴う立会調査	22
3. 発掘調査概要	
平成4年度ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要	23
横寺遺跡 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査	26
市道－北溝手支線第3021号線の拡幅工事に伴う発掘調査	32
4. 発掘調査報告	
早溝遺跡	35
紀文食品工場建設に伴う発掘調査	41
金井戸・新田遺跡	44

図 目 次

第1図 確認・立会調査位置図1 (S=1/50,000)	3	第5図 調査区(S=1/2,500)	6
第2図 確認・立会調査位置図2 (S=1/50,000)	4	水島機械金属工業団地協同組合西団地の 拡張に伴う遺跡分布調査	
新本幼稚園園舎改築に伴う確認調査		第6図 計画地遺跡分布図(S=1/5,000)	8
第3図 位置図(S=1/10,000)	5	カルビス食品工業㈱岡山工場増築に伴う確 認調査	
第4図 周辺の地形(S=1/2,500)	6	第7図 位置図(S=1/5,000)	10

第8図 土層状況図 (S=1/60)	1	第25図 第3調査区低位部出土遺物 (S=1/4)	28
0 共同住宅建設に伴う立会調査		第26図 第4調査区低位部出土遺物 (S=1/4)	28
第9図 立会調査位置図 (S=1/5,000)	11	第27図 第4調査区低位部出土遺物 (S=1/4)	29
砂川流域における遺跡分布調査—その1—		第28図 第4調査区SE01出土遺物 (S=1/4)	30
第10図 調査地位置図及び古墳分布図 (S=1/10,000)	14	第29図 第4調査区SE01周辺出土遺物 (S=1/4)	30
マンホール設置に伴う立会調査		市道一北溝手線第3021号線の拡幅工事に 伴う発掘調査	
第11図 立会調査図 (S=1/5,000)	15	第30図 総社平野内の集落遺跡分布図 (S=1/40,000)	34
(仮称)埋文学習の館造成に伴う確認調査		早溝遺跡	
第12図 位置図 (S=1/5,000)	16	第31図 調査区位置図 (S=1/2,000)	35
第13図 H-2 断面図 (S=1/40)	17	第32図 近世〜中世遺構配置図 (S=1/160)	36
第14図 遺構配置図 (S=1/500)	17	第33図 古代〜弥生時代遺構配置図 (S=1/160)	36
第15図 H-2 出土遺物 (S=1/4)	17	第34図 調査区土層図 (S=1/100)	37
奥坂地区出土の須恵器		第35図 溝-5・10出土遺物 (S=1/4)	37
第16図 位置図 (S=1/5,000)	18	第36図 調査区位置図 (S=1/5,000)	39
第17図 出土遺物 (S=1/4)	19	第37図 遺構配置図 (S=1/300)	40
療幼稚園建設に伴う確認調査		第38図 溝-1 出土遺物 (S=1/4)	40
第18図 位置図 (S=1/5,000)	20	紀文食品工場建設に伴う発掘調査	
第19図 トレンチ位置図 (S=1/1,000)	21	第39図 開発範囲と調査区 (S=1/5,000)	42
第20図 土層柱状図 (S=1/40)	21		
窪木排水路改良工事に伴う立会調査			
第21図 位置図 (S=1/10,000)	22		
横寺遺跡 新本新庄地区ほ場整備事業 に伴う発掘調査			
第22図 横寺遺跡調査区配置図 (S=1/3,000)	27		
第23図 第1・3調査区 (S=1/800)	27		

表 目 次

表1 立会確認調査一覧表	3	表2 古墳一覧表	14
砂川流域における遺跡分布調査—その1—			

図 版 目 次

砂川流域における遺跡分布調査—その1—		横寺遺跡 新本新庄地区ほ場整備事業 に伴う発掘調査	
第1図版 新規発見の古墳(西から)	12	第10図版 第1・3区調査区	31
(仮称)埋文学習の館造成に伴う確認調査		第11図版 第4調査区	31
第2図版 全 景	17	市道一北溝手支線第3021号線の拡幅工事 に伴う発掘調査	
第3図版 H-2 中央穴	17	第12図版 住居址検出状況	32
奥坂地区出土の須恵器		第13図版 柱穴群	33
第4図版 調査地遠景	19	早溝遺跡	
第5図版 出土遺物	19	第14図版 全 景	38
療幼稚園建設に伴う確認調査		第15図版 弥生・古墳時代溝	38
第6図版 調査地全景	21	第16図版 調査区全景	40
窪木排水路改良工事に伴う立会調査		紀文食品工場建設に伴う発掘調査	
第7図版 土層状況	22	第17図版 調査区全景(空中撮影)	43
平成4年度ほ場整備事業に伴う 発掘調査の概要			
第8図版 中林遺跡全景(西より)	25		
第9図版 瓦釜区全景(南)	25		

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

平成4年度 文化財行政の概要

総社市の文化財行政は、社会教育課文化係で担当している。係員は8名で、6名が調査担当、2名が事務担当である。事務内容は、大別して埋蔵文化財、文化財保護・啓蒙、文化・芸術活動を担当している。

〔埋蔵文化財部門〕

総社市は古代吉備の中核の地として栄え、数多くの遺跡・文化財が残されている。そして近年市の発展とともに盛んであり、それに伴って平成4年度を通じて発掘調査は継続して行われており、ほ場整備事業・学校建設・民間開発等の現場が常時稼働していた。その内容はそれぞれ発掘調査概要に記している。

他にも確認・立会調査は年間を通じて行われており、その概要を一覧表として掲げている。

調査体制は1名が調整に当たり、調査は5名で対応した。

なお、この年報は一部の資料であっても少しでも早く公開をしたいという目的で誕生したものであるが、発掘調査に追われ整理期間もないままの状態であるため、年々刊行が遅れ気味となっていることを深く反省している。

〔文化財保護・啓蒙部門〕

今年から11月の教育・文化週間に合わせ、総社市内における発掘調査概要の報告会を実施し、スライド上映等の報告会を行った。

また、平成3年9月、台風19号の被害を受け、全面解体修理に着手した備中国分寺五重塔は順調に修理が進行しており、平成5年内には工事完了の予定である。 (高橋 進一)



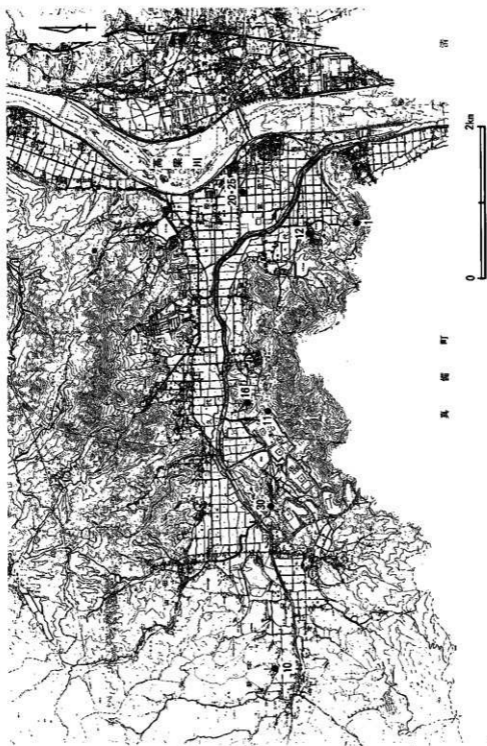
平成の大修理が終った
備中国分寺五重塔

表1 立会確認調査一覧表

番号	所在地	調査原因及び工事内容	区別	調査期間	備考
1	砂古	铁塔建設	立会	H4. 4. 9	古墳2墓
2	真壁51、52	共同住宅建設	立会	4. 18	遺構・遺物なし
3	上林1046	五重塔修理工事関連	立会	4. 20	瓦破片少量採集
4	久米	老人ホーム建設予定地	確認	4. 23	分布調査
5	服部	ケーブル埋設工事	立会	4. 27	遺構・遺物なし
6	三輪	ケーブル埋設工事	立会	5. 11	遺構・遺物なし
7	井手1177	個人住宅建設	立会	5. 11	遺構・遺物なし
8	井手1076-1	店舗駐車場擁壁建設	不時	5. 16	遺構・遺物なし
9	三須	水路工事	不時	5. 16	溝状遺構、遺物なし
10	新本7274	新本幼稚園園舎改築	確認	5. 26	別稿報告参照
11	久代	西団地拡張予定地	確認	6. 3	別稿報告参照
12	砂古	電柱埋設工事	立会	6. 5	遺構・遺物なし
13	窪木	道路擁壁建設	立会	6. 12	弥生〜中世
14	三須1111	商業店舗建設	立会	7. 1	土師器片出土
15	井手113	共同住宅建設	確認	7. 3	近世陶磁器・瓦出土
16	久代	道路建設	不時	7. 6	埴輪出土
17	南溝手287	共同住宅建設	立会	7. 15〜21	弥生土器片少量出土
18	真壁49、50	共同住宅建設	確認	7. 17	遺構・遺物なし
19	真壁800	工場拡張の擁壁建設	立会	9. 25	遺構・遺物なし
20	富原341	病院建設	確認	10. 21	削器表採
21	真壁451	共同住宅建設	立会	10. 23	遺構・遺物なし
22	溝口604-1	下水管埋設工事	不時	10. 29	弥生土器コンテナ1箱
23	黒尾	新規発見	不時	11. 1	別稿報告参照
24	真壁1158-1	マンホール設置	立会	11. 4〜13	別稿報告参照
25	富原341-1	病院建設	立会	11. 27	遺構・遺物なし
26	南溝手277	道路擁壁建設	不時	12. 1	別稿報告参照
27	井尻野1729	共同住宅建設	立会	12. 11	遺構・遺物なし
28	北溝手	道路建設	立会	H5. 1. 8	遺構・遺物なし
29	奥坂195	個人住宅建設	立会	1. 18	別稿報告参照
30	久代〜山田	土取予定地	不時	1. 22	古墳確認
31	北溝手	道路建設	立会	1. 25	遺構・遺物なし
32	真壁460	分譲住宅建設	立会	2. 2	遺構・遺物なし
33	上林	道路建設	立会	2. 3	遺構・遺物なし



第1圖 確認・立会調査位置圖1 (S=1/50,000)



第2図 確認・立会調査位置図2 (S=1/50,000)

2. 確認および立会調査概要

新本幼稚園園舎改築に伴う確認調査

所在地 総社市新本7274番地

調査期間 平成4年5月26日

調査概要

既存の園舎が老朽化により、新たに園舎の建築が計画されたため、確認調査を実施した。

周辺の地形をみると、新本川に向けて張り出した低丘陵の縁辺にあたり、すぐ西の畑などでは土器片が採集されることもあり、当該地に遺跡が存在する可能性が考えられた。

新築の予定される部分は、既存の施設に重複し、しかも遊具等が配置されているため、前庭のなかほどに1×1mのグリッドを3箇所設定し、遺構の有無について検討を行うことにした。

調査の結果、現在の地表から60～80cmの所で灰色の風化花崗岩層となり、これが基盤層に相当すると考えられた。G-3では、南に向かって基盤層がゆるやかに傾斜するようすが確認されたが、いずれのグリッドにも包含層は認められない。また、堆積土中から土器片1点が出土しているが、細片であり、時期は不明である。

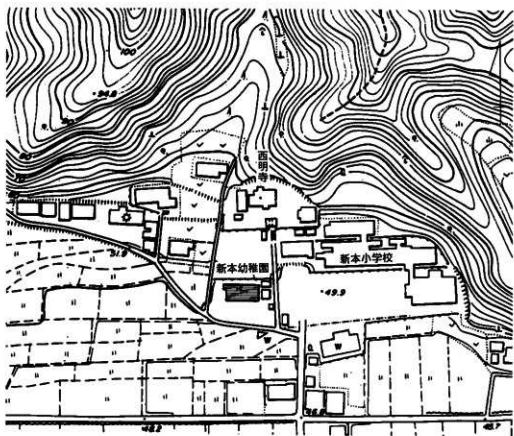
以上のように、確認調査においては、遺跡の存在は確認ではなかったが、かつて東に隣接する新本小学校の体育館の建設の際には、その一部が安定した丘陵上であることが判明していたため、少なくとも園舎の東端付近では、丘陵の縁辺部となるものと予想されたので、建設に着工した時点で念のために立会などにより対応することとした。

しかし、建物の建築位置について、設計上地盤改良が必要で地表から約2m掘削することが判明したため、工事に先行して7月5日にバックホーにより試掘を行った。その結果、北半部はもともとかなり掘削されているらしく、安定した丘陵であるが南半部分はグライ化した湿地状を呈し、とくに東側が安定しているという状況は認められず、また、遺構遺物は認められなかった。

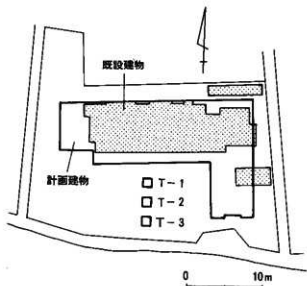
(高田明人)



第3図 位置図 (S=1/10,000)



第4図 周辺の地形 (S=1/2,500)



第5図 調査区 (1/500)

水島機械金属工業団地協同組合 西団地の拡張に伴う遺跡分布調査

所在地 総社市久代1248番地ほか

調査期間 平成4年6月3日

対象面積 9.72ha

調査経過

昭和61年2月にはじまる西団地造成に伴った発掘調査は、幾多の協議を重ねたのち、集落遺跡3ヶ所・古墳9基の予定で当初はじまった。しかし、開突面積約75haという中では分布・試掘調査で発見できない遺跡もある程度存在するものと予想していたものの、山林の完全伐採が行われると予想外に多くの遺跡が発見され、最終的に集落遺跡3ヶ所・古墳36基・製鉄遺跡5ヶ所の大規模調査となった^註。そして昭和62年8月その幕を閉じた。

これにより、15工場が平成2年5月に操業を開始し、総従業員数約1300名という一大工業団地となった。しかも、その後親企業の生産ライン拡充によりさらに3社が西団地への工場進出が必要となったため、今回の西団地増設計画となったものである。そしてその予定地は、現西団地のすぐ東側に置かれることとなった。

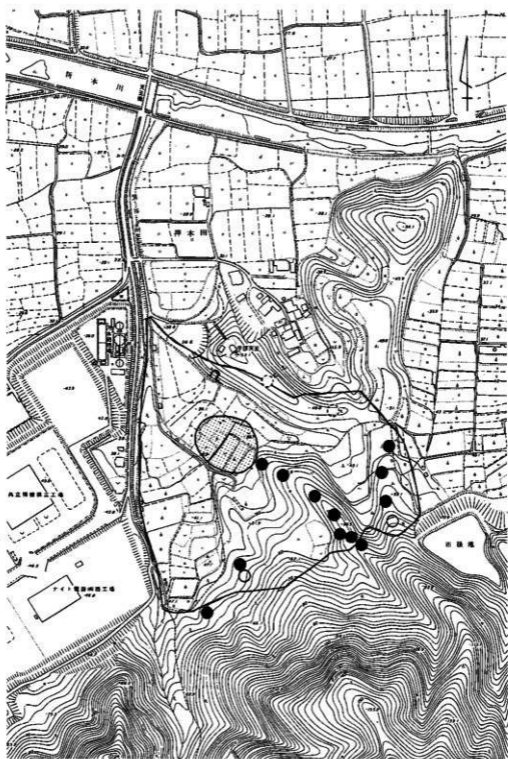
調査結果

分布調査は、下草の伐採をせずに実施している。しかも丘陵の尾根線と開墾地のみをおもに踏査したものである。よって今回発見された遺跡はその一部にすぎず、事業計画が進捗し山林の伐採が行われた時点で試掘調査を実施する必要がある。さらに工事に伴う完全伐採がなされればより遺跡の数は増えるものと推定される。

まず、周知の遺跡として古墳が10基ある。このうち、計画地東端の丘陵尾根線上にある2基についてはそれらしい高まりすら確認することができなかった。しかし、残る8基についてはすべて確認できたものの、1基新規発見の古墳があるために、周知古墳との対応ができないものもある。また、このほかにも3基の古墳の存在を確認し、さらに古墳状の高まりもいくつか認められた。

計画地内に存在する古墳の多くは横穴式石室墳と推定されるが、尾根線上や古墳と確定できないものについては箱式石棺等の可能性がある。いずれにせよ、計画地内には細長くのびる丘陵が2つあり、この尾根線上を中心に、その斜面やその付け根の傾斜地にも古墳が築かれているものと推定される。このほかの部分については丘陵の傾斜がきつく、またその突出も小さいことから多くの古墳は築かれなかったものと考えられる。

つぎに古墳以外では、今回の分布調査によって新たに集落遺跡の存在が確認されたほか、須



第6圖 計面地遺跡分布圖 (S=1/5,000)

恵器窯もしくは炭窯を斜面切り通し面で1基確認した。

集落遺跡は、計画地の中央部にあり、古墳の多く存在する丘陵先端より緩やかにのびた傾斜地上である。現状は開墾で段畑となり、この丘陵の両側には谷が深く入り込むため、推定される遺跡の範囲はあまり広いものとならない。谷を挟んだ西側の丘陵上からは、さきの調査により弥生時代の集落となる板井砂遺跡が発見されている。今回、新たに確認された遺跡からも弥生土器のほか、土師器・須恵器も表面採集されており、その量は少ないものの古墳時代以降の小集落も想定される。

また、丘陵斜面の切り通しで確認された窯状遺構は、「U」形の窯体がみられ、しかも窯の方向が丘陵に直交するものと推定されることから、須恵器窯の可能性が高い。しかし、周囲の分布調査で遺物は採集されていない。

まとめ

調査の結果、古墳を12基、集落を1ヶ所、窯状遺構を1基確認することができた。しかし、分布調査の対象面積が広いことや山林の伐採がなされていなかったことなどから、古墳や集落などの分布を確認したにとどまる。古墳はいずれも径6～15mの規模で、それ以上のものはない。また、集落は小屋根上に立地していることから小規模の遺跡となろうか。

なお、さきの西団地の調査で教訓となった分布調査と試掘調査、本調査それぞれの遺跡発見数の差がかなり異なっていることを踏まえておく必要があり、今回についても未発見の遺跡が当然ながらあるものと考えなければならないであろう。とくに製鉄関連遺跡については地表面にその痕跡を残しづらいためであり、おそらく今回の開発予定地内にも製鉄関連遺跡は確実に存在しているものと考えてよいであろう。さらに、板井砂遺跡で遺構は検出されなかったものの縄紋土器が出土しており、のちの遺構掘削により消滅したものであろうが、おそらく遺構を掘り込んだ土砂とともに多くの遺物が谷内に捨てられているものと考えられる。開発予定地の西端にその谷が所在していることから、発掘調査の必要性があるものと考えられ、遺構としてはその証明ができないものの検出される遺物から推定された時代の存在を明らかにするものである。

(前角 和夫)

注 総社市教育委員会「水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群」(総社市埋蔵文化財調査報告)9, 1991)

カルピス食品工業（株）岡山工場 増築に伴う確認調査

所在地 総社市真壁 800

調査期間 平成4年4月21日～4月23日

調査概要

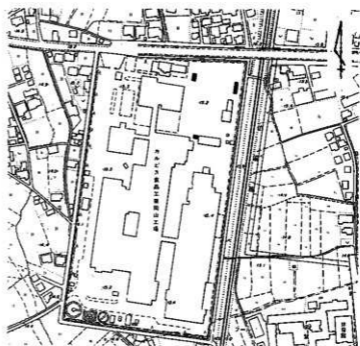
予定地は稼働中の工場敷地内であり、一部が運動場のほかは、建物やアスファルト舗装地である。掘削可能な空白地を選定し、トレンチを設定して重機による掘削を行った。

いずれのトレンチでも旧水田面上に1.5～1.7mの厚さの真砂土等が客土されている。東端のトレンチでは旧水田層の下に約80cmの厚さで水田土壌の堆積が認められる。その下は砂礫層になっている。

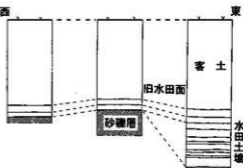
その他のトレンチでは旧水田層の直下から砂礫層になっており、現地表から砂礫層までは1.6～1.7mの深さである。この地のベースとなる砂礫層は南端で低く、北で高くなっている。遺物は、南端トレンチの水田土壌中から中世土器の小片が出土した以外は認められなかった。

これらの状況及び、周辺で実施された確認調査の結果・航空写真等から工場予定地の東西には南北方向の河道の存在が予想され、この間には微高地があるものと考えられる。

(高橋)



第7図 位置図 (S=1/5,000)



第8図 土層状況図 (S=1/60)

共同住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市真壁 30-2

調査期間 平成4年10月

調査概要

本調査地は、岡山県総社地域保健所の北東、また倉敷中央公共職業安定所総社出張所の東方向にあたる。この地周辺では、昭和55年から区画整理事業に伴い都市道路部分の発掘調査が実施された。その結果、近くでは総社地域保健所北に接する東西に延びる6m道路で弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が発見された。

その後、平成元年には職業安定所総社出張所建設に伴い実施された発掘調査で弥生時代から平安時代にかけての集落が発見された。

このため、遺跡の広がりや計画地を含む可能性が高いので工事時に立会調査を実施することとした。特に近年は、簡易な建物であっても建設地の地盤を深く掘削し硬化剤を混ぜ改良を行うことが多くなっている。

立会調査の結果、この地では過去に大きく地下を掘削されており、本来の地盤を確認できたのは調査地の東部分だけであった。その状況では集落の存在が可能な微高地であることが確認できた。しかし、遺構は認められなかった。

(谷山 雅彦)



第9図 立会調査位置図 (S=1/5,000)

砂川流域における遺跡分布調査－その1－

所在地 総社市黒尾・久米

調査期間 平成4年11月1日

対象面積 約2600㎡

調査経過

総社平野の北東部に位置する砂川は、古代山城－鬼ノ城の築かれた山塊より足守川にそそぐ、長さ6kmほどの小河川である。日頃は水の流れのほとんどない河川であるが、豪雨ともなると驚くほどの水量をみせる河川でもある。しかも砂川という名称のとおり、かつては膨大な量の土砂を運び込み、また別名天井川ともいわれるように、その川底は平野部よりも高い位置にある。最近まで黒尾周辺の水田地帯には洪水砂による砂山が残されていたという。

しかし、現在においては上流域での砂防工事が数多く行われたことにより、中流域を河川公園として、水辺のせせらぎが体験できるよう、ウォーター 슬라이ダーをはじめ、キャンプ場等に利用できるスペースを有している。

さて、今回の調査は、これまでの砂川公園駐車場がせまくなり、路上駐車等の問題も生じてきたため、その大幅な増設が必要となったものである。ただし、調査は工事途中において偶然に発見されたものであり、当初の発掘調査事業計画にあったものでもないことから、確認調査を実施することはできなかった。

調査結果

事業内容が駐車場にするための造成工事であり、基本的に地下を掘削することがないことや、これまで水田や観光柿園として利用されていた平地部のみを盛土造成し、丘陵部端等を崩すことがないこと。さらに調査時点で、すでにあらかたの造成工事が終了していたことなどにより、工事範囲内において遺跡が存在していたかどうか確認することはできなかった。ただし、範囲外の平地部において行った分布調査では土師器・須恵器などが小量採集されている。いずれも小破片で、時期のわかるものは少ない。立ち上がりや欠いた坏身・外面平行タタキの破片・くわわんか茶碗などである。また、若干摩滅しているものもあるが、これより上流域に平地部が認められないことから、駐車場予定地内に小集落遺跡が存在していた可



第1図版 新規発見の古墳（西から）

能性が高い。

ほかには駐車場の中ほどに短く張り出している小丘陵上において古墳が1基発見された。古墳はその稜線上にあり、直径7・高さ0.6~0.8m程度の高まりで確認された。しかも山側には幅2.5mほどの周溝が残されており、谷側にも浅い凹みがみられることから周溝が全周しているものと推定される。墳丘上には横穴式石室を推定させるような石材は露出しておらず、またその規模等から考えても前期古墳となる可能性が高いと思われる。

まとめ

以上のように、直接の原因となる駐車場増設工事においては遺跡の存在を確認することができなかったものの、現状のまま駐車場内に残された小丘陵上より新たに古墳を1基発見することができた。

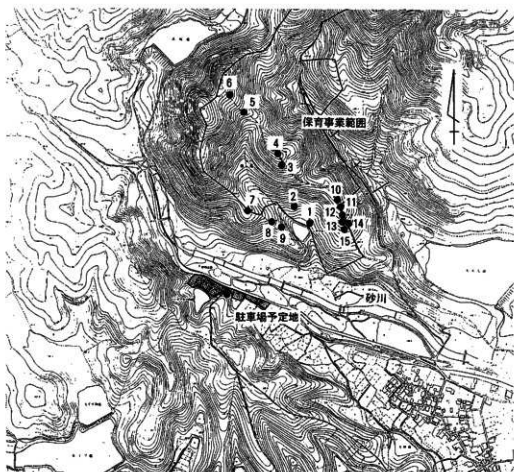
なお、昨年度の分布調査ではあるが、今回の調査地に近く、新規発見の古墳数もかなりの数になることからあわせて報告しておきたい。

調査地は、砂川をはさんだ向側の丘陵地である。調査日時は1992年2月8日で、休日にもかかわらず横田武夫氏におかれては道案内をはじめ、調査全般にわたってご協力をいただいたこと、ここに記してお礼申し上げます。

さて、調査の契機となったのは、総社市森林組合による保育事業として下草の伐採が本調査地で行われたことによる。対象面積は33.5haにおよび、そのうちの約半分を踏査することができた。これまでに確認されていた古墳はわずか3基であったが、今回の調査によって12基もの古墳を発見することができた。残る未踏査範囲を加えるとさらにその数は増えるものであろう。

新たに発見された古墳の立地は、丘陵裾部・斜面・頂部・稜線上とがある。横穴式石室が8基、箱式石棺が2基あり、残る2基も低墳丘であることなどから後者の可能性が高い。各古墳の詳細については第1表にまとめておくが、とくに10~15の横穴式石室墳の残りは良好である。なだらかな丘陵斜面に6基がまとまっており、その中には石材を大半抜き取られている11・13もあるが、10・12では天井石がほぼ完全に残されていた。また、ほかの古墳と比較して、墳丘規模が直径15mを越すものもあり、さらに全周する周溝も残されている。このほかには、かなり奥まった。しかも標高の高い位置で発見された5・6がある。現在では道路が砂川沿いの1本となっているが、かつては久米に通じた山道もあり、20年ほど前までは新山・岩屋からの通学路であったという。この路より別れて5・6の前の鞍部を超え、黒尾へ通じる山道もみられ、徒歩の時代においては本道であったのかもかもしれない。5・6はその道の通る谷間に開口し、黒尾の集落が望遠される位置にある。

(前角)



第10図 調査地位量図及び古墳分布図 (S=1/10,000)

表2 古墳一覧表

単位: m

番号	墳形	墳丘規模	埋葬形態	施設規模	備考
1	円墳	径10・高2	横穴式石室	羨道幅1.4	天井石2石露出, 開墾により墳丘一部消滅
2	"	径8・高0.6	箱式石棺	棺長1.5・幅0.8	葺石1石露出, 山側に周溝
3	"	径6.5・高1	?		山側に周溝(幅3m)
4	"	径10・高1	?		山側に周溝, 角礫散乱, 盗掘坑あり
5	"	径8・高2.5	横穴式石室	石室幅1.1	山側に周溝(幅4m)
6	"	径8・高2	横穴式石室	石室幅1.1	山側に周溝(幅4m)
7	"	径5.5・高0.5	箱式石棺		石材1石露出
8	"	径8・高1.5	横穴式石室	石室長5・幅1	周知古墳, 墳丘流失し天井石4石露出
9	"	径7・高1.5	横穴式石室	石室長4.5・幅1.1	墳丘流失し天井石6石露出, 石室は持ち送り跡香
10	"	径12・高2	横穴式石室		周知古墳, 山側に周溝(幅6m)天井石5石露出
11	"	径15・高2	横穴式石室		周知古墳, 石室石材なし
12	"	径15・高2.5	横穴式石室		周溝が全周(幅5m), 天井石1石露出
13	"	径13・高2	横穴式石室		石室石材なし, 山側に周溝(幅5m)
14	"	径11・高2	横穴式石室		石室石材なし, 山側に周溝(幅4m)
15	"	径7・高1.5	横穴式石室		天井石なし, 山側に周溝(幅3m)

マンホール設置に伴う立会調査

所在地 総社市真壁1158-1
調査期間 平成4年11月4・6・13日
調査概要

本調査地は、高梁川左岸にある水島機械金属工業団地の西にあたる。

マンホール設置は、新たに造成された共同住宅の排水のため、北に接する市道に6カ所施設するものである。掘削規模は1.5×2.0mである。

この地周辺では、現在まで掘削を伴う工事が少なく、地下の状況を知る手掛かりがなかった。調査の結果、マンホール及び共同住宅地内の掘削地はいずれも安定した微高地であることが確認できた。また、共同住宅地内では遺構と考えられる土層の変化も認められたが、掘削幅が狭いため遺構の性格は不明である。全地点とも遺物は出土していない。(谷山)



第11図 立会調査位置図 (S=1/5,000)

(仮称)埋文学習の館造成工事に伴う立会調査

所在地 総社市南溝手 277-1
調査期間 平成4年11月30日～12月1日
調査面積 約15㎡

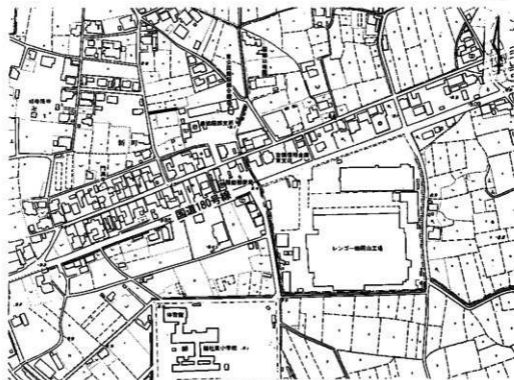
調査の概要

(仮称)埋文学習の館建設に伴い、ヨウ壁を掘削していたところ住居址2軒が検出された。工事中発見のためいずれも断面で観察されており、平面形は不明である。おそらく円形プランを持つ住居址であると考えられる。

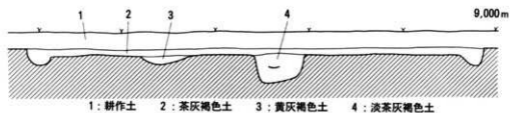
西側で検出されたH-1は、住居址の約1/4がかかっていると推定される。土器小片が認められ、弥生土器と考えられるが不詳。

東側で検出されたH-2は、住居址をほぼ半載していると考えられる。長さ約5mと推定され、床面までの深さは6cm程度であった。床面はよく締まってかたく、黄色の粘土で貼り床されていた。壁体溝の深さは10～15cm程度であった。中央少し西よりの床面から土器片がやや多く出土した。中央穴は長さ約55cm、深さ約30cmを測る。内部から土器片が検出されている。

(高橋)

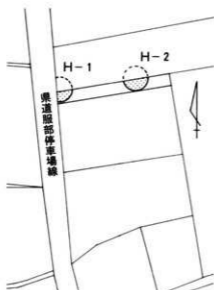


第12図 位置図 (S=1/5,000)

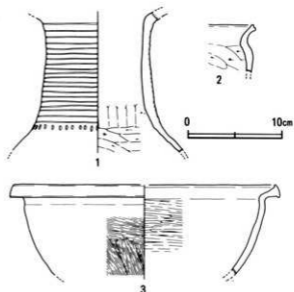


1: 耕作土 2: 茶灰褐色土 3: 黄灰褐色土 4: 淡茶灰褐色土

第13図 H-2 断面図 (S=1/40)



第14図 遺構配置図 (S=1/500)



第15図 H-2 出土遺物 (S=1/4)



第2図版 全 景



第3図版 H-2 中央穴

奥坂地内出土の須恵器

所在地 総社市奥坂 195

調査期間 平成5年1月18日

調査の概要

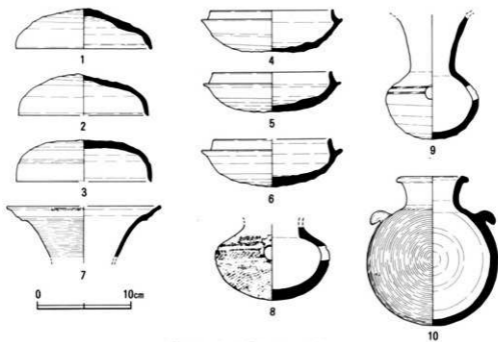
今回の調査は板谷鈴子氏より平成4年11月、自宅改築の際に重機によって掘削を行っていたところ土器が出土したという連絡を受け、現地を調査した。

現地は、舌状に張り出す東西に延びる尾根の南斜面に位置しており、かつての石垣を取り除いたところ土器が出土したということであった。現在は家が建てられており、出土状況を知ることではできなかった。出土していたのは10数点の須恵器で、器種は蓋環、提瓶、甕であった。いずれもほぼ完形品～半分残存していた。器種組成および蓋環にやや時期差が認められることなどから古墳から出土している可能性が考えられるが、確認できなかった。6世紀後半の遺物と考えられる。

また遺物は御好意により総社市に寄贈していただきました。感謝の意を表します。(高橋)



第16図 位置図 (S=1/5,000)



第17図 出土遺物 (S=1/4)



第4図版 調査地遠景



第5図版 出土遺物

秦幼稚園建設に伴う確認調査

所在地 綾社市秦2987番地他

調査期間 平成4年12月17日

調査面積 約50㎡

調査概要

重機によって確認のためのトレンチを園舎建設予定地にL字状に掘削した。また補助的に長さ3m前後のトレンチを3ヶ所設定した。

T-1では基本的な層序として①耕作土の下は②淡黄灰白色土層—③灰黄褐色土層—④淡黄褐色土層の順に堆積している。またトレンチの西端付近では②層と③層の間に灰色土層が最も厚い所で約14cmの厚さで堆積している。

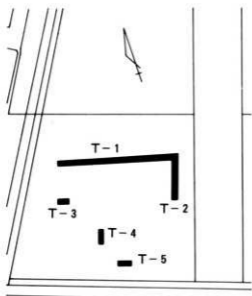
T-2では、T-1と接続している北側はT-1と同様の状況であるが、約6m南から暗渠に伴う攪乱が入っていた。

T-3・T-4・T-5は、耕作土直下に攪乱が認められた。その下は②淡黄灰白色土層—③灰黄褐色土層—④淡黄褐色土層の順に堆積しており、T-1・T-2と同様の状況である。

(高橋)



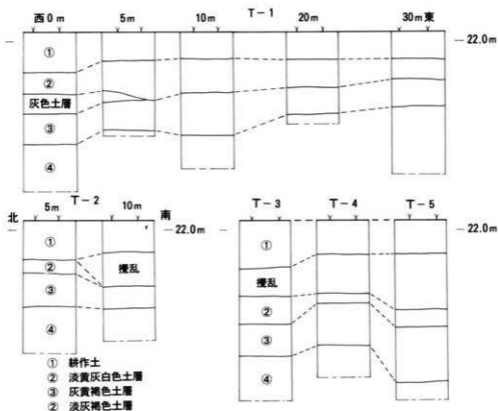
第18図 位置図 (S=1/5,000)



第19図 トレンチ位置図 (S=1/1,000)



第6図版 調査地全景



第20図 土層柱状図 (S=1/40)

窪木排水路改良工事に伴う立会調査

所在地 綾中市窪木地内

調査期間 平成4年12月24日～平成5年1月31日

調査概要

調査地は岡山県立大学敷地の北側に隣接しており、構内の遺跡発掘調査の結果などから南溝手遺跡・窪木遺跡が営まれた微高地の北辺に広がる低湿地と考えられる。

工事は概ね東端から順に西へ向けて行われた。基本的な層序として耕作土～黄灰色層（旧水田層）～灰青・暗灰青色粘土層の順に堆積していた。県立大学敷地内で数条の溝状遺構が検出されており、その続きと考えられる流路とその内部に灰白色の砂層が認められた。

西方へ行くにしたがいき整層が高くなり、微高地となっている。その他には遺構・遺物は認められなかった。

(高橋)



第7図版 土層状況



第21図 位置図 (S=1/10,000)

3. 発掘調査概要

平成4年度ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要

遺跡名	中林遺跡
所在地	総社市下林146-1番地ほか
調査期間	平成4年12月1日～平成5年3月29日
対象面積	約35ha
調査経過	

今回の調査は、平成4年度県営土地改良整備事業として、市内大字下林地区のほ場整備事業に伴う発掘調査である。調査地は総社平野の東部、前川が幾多に蛇行して形成した微高地上に位置しており、標高は約8.5mを測る。周辺の調査では、前川改修および前年度ほ場整備に伴って実施した産木薬師遺跡の発掘調査がある。^註

検出遺構

調査は、工事施工高の関係により、遺構の削平される範囲を全面調査とし、遺構面に達しないものの影響の残る範囲を遺構確認（検出）調査として行った。調査区が点在し、それぞれに小字あるいは水田区画・排水路番号等を付けて区別したところから、この調査区ごとにまとめる。

土井区からは、竪穴住居跡2軒ほかを検出された。うち1軒は4.4×6.6mの長方形で、北辺中央にかまどが付く。

D-4区からは、住居跡6軒が検出されたものの、排水路の幅が1mであり、その一部が調査されたにすぎない。あえて推定復元すれば、方形・隅丸方形・円形の各プランがある。方形の住居跡は一辺6mほどで、中央に炉をもつものと考えられる。

D-3区もD-4区と同様に、調査区の幅が1mであることから、検出された5軒の住居跡はいずれもその一部の調査である。しかし、5軒とも方形プランと推定され、うち1軒には北辺にかまどを検出した。残る4軒もかまど付き住居と推定される。

川原区からは、円形の住居跡が1軒検出されたのみである。住居跡はおよそ1/2が調査され、壁帯溝が一部で二重となることから建替えが推定される。また、中央炉のほかに赤く焼けた床面がいくつか検出されている。

瓦堂区からは、そのほとんどにかまどの付く住居跡を9軒検出した。ほかに掘立柱建物跡が1棟確認されている。この調査区では3軒にわたる住居跡の切り合いが認められ、1番古い住居跡からは類かまどと推定できるような遺構が検出された。なお、かまどの付く位置は北辺が5軒、西辺が1軒、北西辺が1軒である。

61号区からは、調査区の東端でかまど付きの住居跡1軒が確認されたほかは、古墳時代以前の遺構面に達していなかった。おもに確認された遺構は古代以降であり、水田耕作に伴う小溝

群や井戸のほか、約1m間隔に並ぶ柱穴群が東西で20m以上、北に折れて8m以上となる櫛列を検出した。おそらく方形に囲んだ屋敷地の跡であろうか。

62号区からは、1間×3間以上の建物跡1棟のほかは、溝・土坑などがわずかにあるのみで、調査区の半分は礫層が露出している。

63号区からは、南北に走る溝群と、東西に走る溝群が確認されたのみである。地形的には低地部へ下がりはじめた位置にあり、工事施工高は中近世の遺構面にとどまる。

67号区からは、かまど付きの住居跡が5・円形の住居跡が5軒程度検出された。かまどの付く位置は、南東が2・北が2・北東が1軒である。

出土遺物

コンテナにして40箱ほどの遺物が出土している。土器では、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器がある。ほかに遺構に伴っていないが奈良時代あたりの平瓦が出土している。

遺構出土の遺物については、現在、別の遺跡の整理中につき、本遺跡についての整理はまだ行っていない。調査中の判断では、瓦堂区のかまど付き住居群は6世紀中ごろ～7世紀前半で、そのほかの地区のかまど付き住居も同じころのものと推定される。また、中央炉をもち方形となるD-4区検出の住居は須恵器を伴わない古墳時代前期、67号区などの円形住居は弥生時代中期ないし後期となろうか。

なお、昨年度に古代吉備文化財センターが調査した窪木薬師遺跡の鍛冶関連の遺構は、中林遺跡が前川をはさんだ対岸に立地することや、わずかに木炭窯と推定される土坑が1基検出されたのみであることから窪木薬師集落とは別の農村集落であろうか。

まとめ

調査区が小規模かつ点在していることから、住居跡はじめ、各遺構全体のわかるものが少ない。しかしその反面、集落全体の状況がある程度であるがわかってきた。

まず、弥生時代の集落については推定される遺跡全体範囲の北側部分、前川に沿った微高地を基本生活領域として住居跡ほかがあり、そのさらに北側・前川との低地部を水田地帯とする機能空間があったものと考えられる。

そして古墳時代前期の集落はその規模を縮小するものの、弥生集落を踏襲するようである。しかし古墳時代後期になって集落の中心は微高地の南側部分に移され、瓦堂区のようにかまど付き住居群が出現する。そのかまどの付く位置であるが、微高地の南側では北、北側では南となり、微高地の中心に向けて住居が築かれたようである。古墳時代以降については奈良時代の溝か土坑のほかは、古代か中世と推定される。櫛列で囲う屋敷地を微高地の東端で検出したが、これら遺構密度はまばらとなっている。

(前角)

註 調査は、古代吉備文化財センターと総社市教育委員会とでそれぞれ実施した。

岡山県古代吉備文化財センター「所報吉備」第12号、1992

総社市教育委員会「総社市埋蔵文化財発掘調査年報」2、1993



第8図版 中林遺跡全景（西より）



第9図版 互堂区全景（南）

横 寺 遺 跡

新本新庄地区ほ場整備事業に伴う調査の概要

遺 跡 名	横寺遺跡
所 在 地	総社市新本6212他
調査期間	平成4年11月17日～平成5年3月31日
調査面積	4200㎡

総社市新本地区は高梁川右岸に広がる平野部の最奥部に位置し、三方が山に囲まれている。その丘陵裾部には、多数の古墳が確認されており濃密な遺跡の分布が予想されている。

この平野の中心を東に流れる新本川の左岸域、新庄地区で平成3年から7年の予定では場整備事業が計画された。これに伴い総社市教育委員会で平成4・5年度工区について11月より確認調査を重機によって行い、遺跡の範囲・状況を明らかにした。

この結果、山裾の細長い段丘上から舌状の丘陵平坦部にかけて遺構が濃密に分布することが判明した。

このため、関係機関と保存のための協議を行い、止むを得ず遺構に影響が及ぶ部分については発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

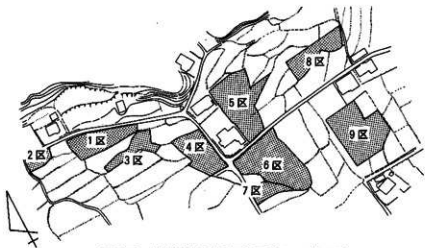
調査は便宜上、1区から9区に分け平成4年度は、1区から4区の調査を行った。

1区は、新本川に合流する木村川によって浸食された東西に細長い段丘で本年度の調査では最も遺構が濃密に検出された。遺構は耕作土直下で、弥生時代から中世までが同一面で確認できた。調査した遺構は、弥生時代後期の住居跡5、古墳時代の住居跡8、7世紀末葉の独立建柱建物跡3、鎌倉時代の独立建柱建物2、各時代の土壇・柱穴・溝など多数である。

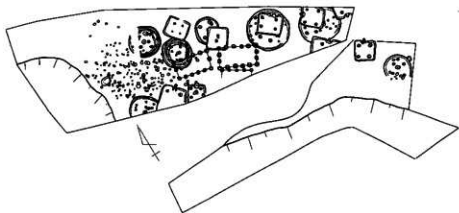
2区は斜面堆積の包含層が確認できたのみで、遺物は多く出土したものの遺構は検出できなかった。

3区は1区の下段に位置し低位部の肩と、弥生時代・古墳時代の住居跡各1を検出した。低湿地部からは、上方から投げ込まれた状態で大量の弥生土器・土師器・須恵器が出土した。特に、7世紀の建物群の下方からは、粘土や炭、建築材に混じって須恵器がまとまって出土した。(第25図)

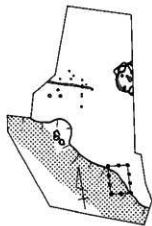
4区は舌状に突出する丘陵の付け根にあたり、3区から続く低位部が南に屈曲する肩部を検出した。段丘上は削平の為、弥生時代後期の住居跡1を検出したのみであるが、低湿地部では、9世紀末の井戸、造成遺構、独立建柱建物などを検出した。造成遺構は、屈曲する低位部を直線



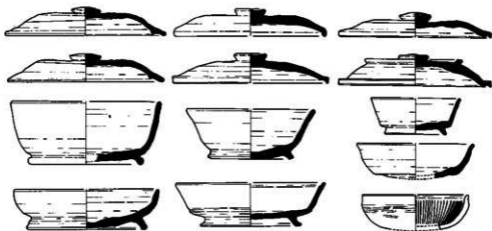
第22図 横寺遺跡調査区配置図 (S=1/3,000)



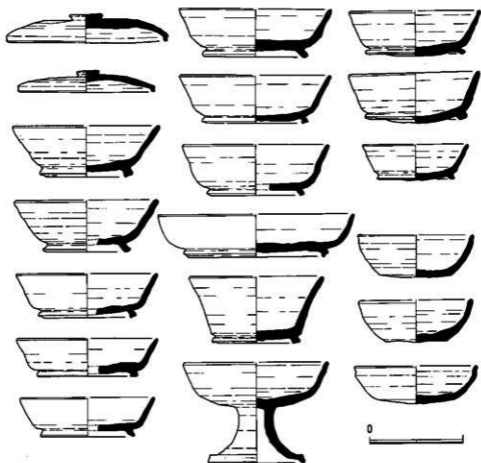
第23図 第1・3調査区 (S=1/800)



第24図 第4調査区 (S=1/800)



第25図 第3調査区低位部出土遺物 (S=1/4)



第26図 第4調査区低位部出土遺物 (S=1/4)

的に拡張する為に行われたと思われる、無数の木杭を打ち込み木枝と角礫を敷いた後に土を盛っている。井戸は曲物や廃材を用いた簡易な構造であるが、中と周辺から内面黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・風字硯などがまとまって出土した。

造成土より下層の粘質土からは、段丘上から投棄されたような状態で大量の弥生土器・土師器・須恵器が出土した。特に、丹塗暗文土師器、円面硯（第27図）の出土は平成5年に調査を行った、段丘上で検出された建物群との関係を考える上で興味深い。

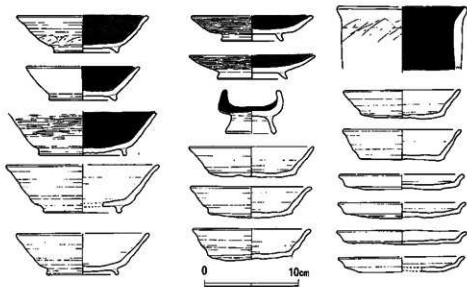
また、初期須恵器と共存する土師器、特にミニチュア土器がまとまって出土したことは水に関した祭祀が行われた可能性も考えられる。

本年度に調査を行った1区から4区は横寺遺跡の中では、やや緑辺に位置し集落の中心ではない。しかし、山裾の狭く細長い段丘上にも濃密に遺構が存在する事は、新庄地区の遺跡の在り方を顕著に表したものと考えると共に、今後の調査を進める上での指標となった。

（武田 恭彰）



第28図 第4調査区SE01出土遺物（S=1/4）



第29図 第4調査区SE01周辺出土遺物（S=1/4）



第10图版 第1・3調査区



第11图版 第4調査区

市道一北溝手支線第3021号線の拡幅工事に伴う発掘調査

遺跡名	南溝手遺跡
所在地	総社市南溝手119-3番地ほか
調査期間	平成4年7月20日～10月16日
調査面積	約500㎡
調査経過	

本線の拡幅計画は、岡山県立大学の周辺整備に伴うものである。平成元年12月大学予定地が総社市の東部、窪木・南溝手に決定された。これに伴い、岡山県教育委員会が大学構内での発掘調査を開始し、総社市教育委員会においても国道180線からの進入路に対する発掘調査を実施した^註。さらに大学周辺の道路整備等についても順次計画がなされ、本線が大学の正面に沿った道路であることから、開学に合わせて工事を完了させることとなった。本線の拡幅は現状の道路を利用しながら約2倍幅の道路にするもので、大学用地内が1mあまりの盛土が行われることから必然的に道路の高さも現状より高くなる計画であった。そこで調査は、厚い盛土面となる路線部分については現状保存とし、掘削を伴う水路部分についてのみ調査を実施することとなった。大学内の調査結果によれば、一部に集落が推定されるものの、旧河道内となる部分も多いことがわかっており、今回の調査においても河道部分については水路幅が1～2mとなることから底まで掘ることができなかった。

検出遺構

検出した遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、井戸、柱穴ほかである。しかし、調査区の幅が2mほどであったことから柱穴以外の遺構はその一端を検出したにすぎず、住居跡などは平面形の半分ほどである。また、掘立柱建物の復元などはほとんどできなかった。なお、大学構内の南溝手・窪木遺跡の両弥生集落、進入路の窪木宮後遺跡の弥生集落からも同時期の遺構が存在しており、これらとの関連も検討しなければならない。地形的には各集落間に旧河道などの低位部が介在するなどしているようであり、本遺跡の遺構密度から推定すると一時的な小集落になろうか。



第12図版 住居跡検出状況

出土遺物

コンテナにして20箱ほどの遺物が出土している。土器は、弥生土器がほとんどであり、須恵器・土師器などは皆無である。土坑・柱穴からの出土が多く、完形となるような弥生土器もいくらか確認している。このほかに弥生石器も数点であるが確認されている。

遺構出土の遺物については、現在、別の遺跡の整理につき、本遺跡についての整理はまだ行っていない。また、遺物台帳も未登録であることから遺構と遺物の対応ができないもの、調査中の判断では弥生中期を中心とした集落と推定される。しかし、個々の詳細な時期についての検討は行っていないので明確にできないが、遺構から判断されるように遺物の上でも短期間のまとまりがとらえられるのではないだろうか。



第13図版 柱穴群

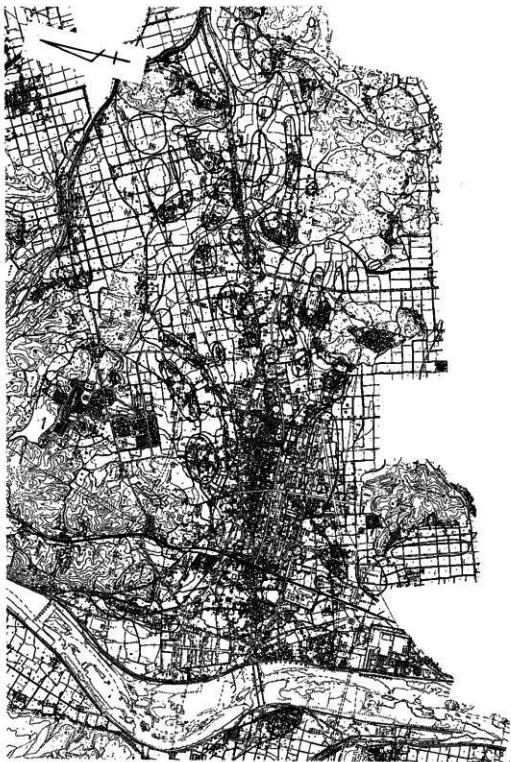
まとめ

調査の結果、弥生集落の一端を確認することができた。しかも、調査は長さ250mにわたって実施したことから集落の東端から西端を明確にすることとなった。中央には住居群があり、その周囲に柱穴群をもつことから掘立建物群が推定され、さらにその外側に井戸・土坑がある。そして遺構はまばらとなり、地形も低位部に入ること集落外のおそらく水田地帯となろう。また、旧河道部にも水田がつくられており、大学構内の旧河道部からは区画された水田畦畔が検出されている。

これまで総社平野内の弥生集落は真壁遺跡を拠点集落として弥生前期から後期まで継続し、各微高地には分村の形態として中期後半以降、後期末に爆発的な集落の増加がなされたものと推定されていた。しかし、調査例が増加されるにつれて前期末にはいくつかの微高地で集落が営まれ、その中には中期にガラス製作をも行いえた中心的集落が発生し、またその分村も形成されたようである。今回調査の集落遺跡はこの中心的集落の分村となるものであろうか。いずれにせよ平野内の微高地に推定される遺跡はかなりの数にのぼる(第30図)。しかし、その時期等については分布・発掘調査がなされていないことから不明瞭な部分が多いため、今後の課題でもある。

(前角)

註 岡山県古代吉備文化財センター『所報吉備』第14号、1993
総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』1、1991



第30図 總社平野内の弥生集落遺跡分布圖 (S=1/4,000)

4. 発掘調査報告

早 溝 遺 跡

(1) 総社東中学校パソコン教室建築に伴う発掘調査

所在地	総社市井手565番地
調査期間	平成4年4月1日～平成4年4月25日
調査面積	220㎡

当調査は総社東中学校のパソコン教室建築に伴って実施したものである。

平成3年10月に総社市外二箇村中学校組合より教育委員会に総社東中学校のパソコン教室の建築にあたり、埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあった。

これを受けて、教育委員会では試掘調査を行った結果、遺構を確認したため工事によって影響を受ける部分について発掘調査を行い記録保存の措置を取る事となった。

遺跡は旧市街地の中心部に鎮座する総社宮の南約300mに位置する。総社平野には現高梁川から足守川に東流していた無数の旧河道によって形成された微高地が存在する。早溝遺跡はそうした微高地の南縁に位置し、弥生時代から近世までの溝が集中して検出された。調査は、運動場造成土と耕作土を重機で除去した後、人力で精査を行った。その結果、ほぼ同一の面で全ての遺構の検出が可能であった。遺構は溝のみで地形に沿ってほぼ東西に走るものが多い。

溝1から溝4は、浅く淡灰色の砂質土の層土で、時期は近世から中世と考えられる。

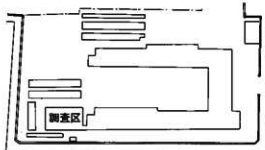
溝5から溝10は、何れも幅が広く深い。また、底面の状態や土層の観察から数回の掘り直しがあつた事が窺える。何れの溝も遺物の出土量は少なく、確実な時期の断定は困難であるが、弥生時代後期から古墳時代初頭の所産と考えて大過あるまい。

当遺跡の南には三須丘陵の北辺を東流する旧河道が現在も低位部として確認できる。

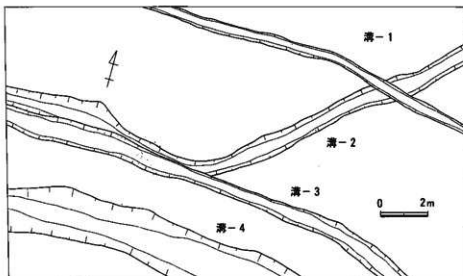
また、当遺跡の所在する微高地は北と東に伸びている事は確認されているが北には現グラウンド付近で、やや低くなり旧市街地で再び高くなると思われる。

今回、同時に行った体育館建設に先立つ確認調査では現校舎付近で古墳時代の住居跡1軒を検出したが、他に遺構はさほど確認出来なかった。

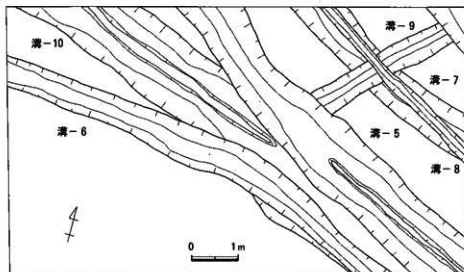
このような、旧河道に接した微高地の肩部に溝が走り住居が疎らに点在するという状況



第31図 調査区位置図 (S=1/2,000)



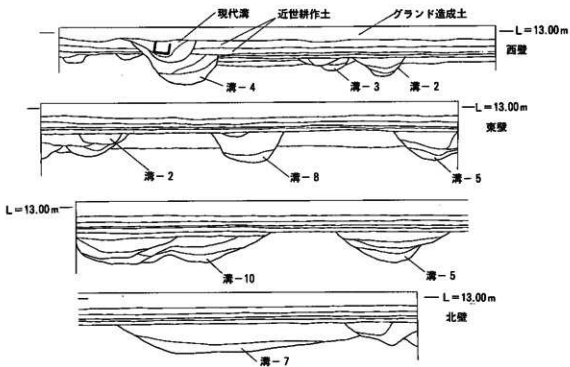
第32図 近世～中世遺構配置図 (S=1/160)



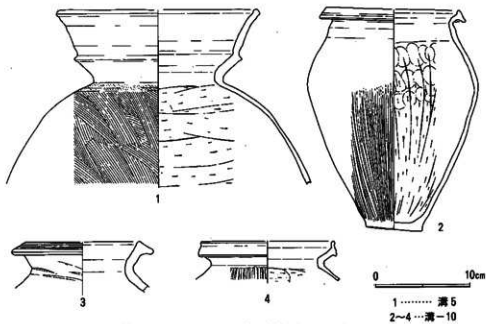
第33図 古代～弥生時代遺構配置図 (S=1/160)

は、本遺跡の南西約300mにあり、区画整理事業に伴って調査された真壁遺跡でも確認されており、無数の旧河道と低位部が存在していた総社平野では一般的な集落の在り方と考えられる。

(武田)



第34図 調査区土層図 (S=1/100)



第35図 溝-5・10 出土遺物 (S=1/4)



第14図版 全景



第15図版 弥生・古墳時代漢

(2) 屋内運動場建設予定地

所在地 総社市井手565番地
調査期間 平成5年2月4日～3月24日
調査面積 約1,000㎡

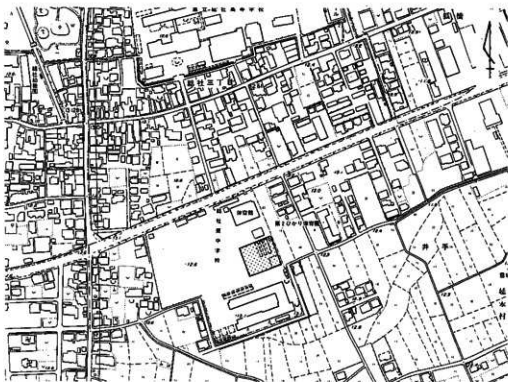
調査概要

遺跡は南西に向かって高くなっており、東西に延びる微高地末端に位置していると考えられる。現在は運動場として利用されているため、旧水田の上に約50～60cmの厚さで真砂土が客土されている。

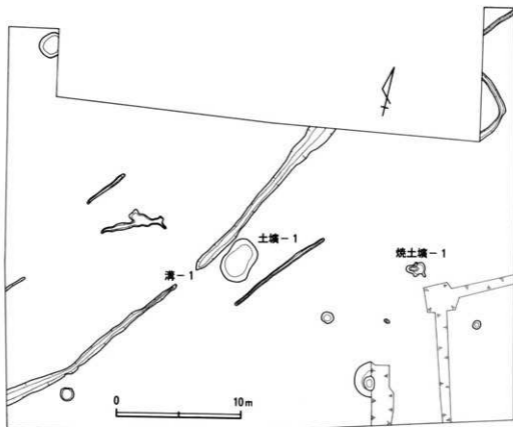
検出された遺構は溝・土壇・柱穴である。

調査区中央西よりで検出された溝-1は、上面の最大幅2m、深さ約50cmを測る。他にもやや小さな溝が数本認められたが、ほとんど削平されている。

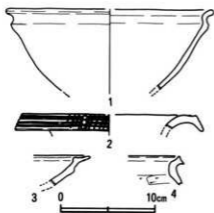
土壇は大小7が検出された。最大の土壇-1は長軸3.4m・短軸2.5mを測る。また内面が淡赤褐色によく焼けた土壇（焼土壇-1）も検出されている。いずれの土壇も遺物が出土しておらず、時期は不明である。



第36図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第37図 遺構配置図 (S=1/300)



第38図 溝-1出土遺物 (S=1/4)

まとめ

以上の結果から本遺跡は集落の外縁に広がる微高地の末端であると考えられる。微高地の傾斜から集落本体は運動場の南方に存在していると推定される。 (高橋)



第16図版 調査区全景

紀文食品工場建設に伴う発掘調査

遺跡名 井尻野西川遺跡
所在地 総社市井尻野1674番地外
調査期間 平成4年8月17日～平成4年11月6日
調査面積 4900㎡

調査の概要

当該地については、平成4年3月にバックホウを使用して埋蔵文化財の確認調査の結果、水田遺構の存在することが知られていた。そして、遺構の存在する範囲内の擁壁部分（A区）及び工場棟予定地（北半をB区、南半をC区）について、発掘調査を実施した。

遺跡は、高梁川の埋没した旧河道を利用しており、高梁川に平行に帯状に広がり、下流ほどその幅を増している。調査範囲内では、ほぼ全面にわたって水田の遺構が確認され、西端部分では円礫を並べた護岸状の施設が存在した。遺構面は1面のみで、大半は洪水で覆われ、水田面の下は、すぐ砂礫層となっているところが多かった。

調査区は、A区とB・C区がやや離れているため、面的なつながりは、いまひとつ判然としない面もあるが、畦畔の方向は水路などで区画される範囲を単位として変化しているようであり、C区は水路で画される3単位が認められるが、さらに細かくみれば8単位以上に分割しようと思われる。

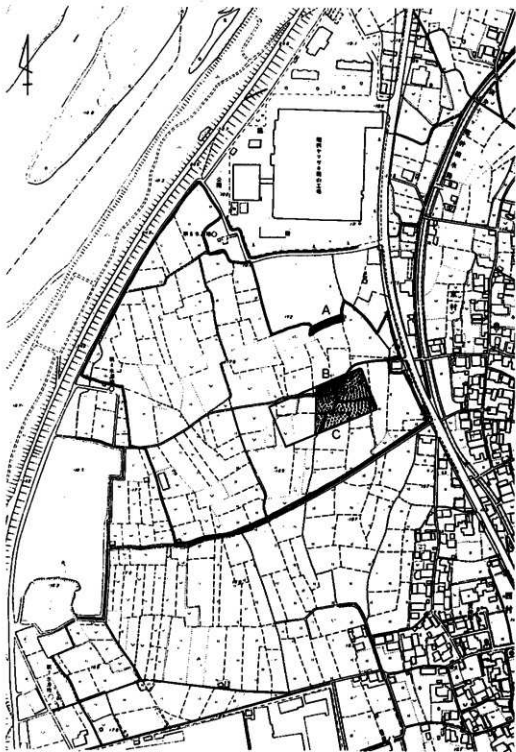
水田の区画は、極端な短冊形を呈しており、小畦畔の間隔は1.2～1.8mであるが、大畦畔で区画される単位内でも一定しない。長さは、区画の端がわかる範囲では最大約50mで20～30mのものが多い。畦畔は小畦畔となる細いものと、道として機能を想定できるやや幅の広いものの二者があり、後者は、水路の両側などに見られ、基礎部に角のある円礫を埋め込んだ例もある。水路は、幅1m程度で、B・C区の中央を貫流するものは下流で分岐するが、一部に護岸を堅固な石積みとしたところもある。また、この水路は現存のものに重複するところもあり、これら水田遺構の年代が当初の予想よりもかなり下るらしいことをうかがわせているかもしれない。

出土遺物は、量はごく少ないが、近世以降の土器片が大半である。年代については、水田面の直下の粘土層中に混入していた土器片から、中世にまで遡る可能性を想定しようものの、下限については高梁川の堤防が決壊して大洪水が生じた明治20～30年代とみられる。

以上のように、井尻野西川遺跡では、近世を中心とする水田遺構の存在が確認された。

これらの水田は、通常連綿と耕作が行われるため、遺構として残存するケースはごくまれである。今回の例では、洪水砂で一度に埋没してしまい、しかも洪水砂や砂礫の堆積が約1mと厚いという条件のため、後世の耕作の影響をうけることなく畦の高さまではっきりわかるという非常に珍しい資料が得られた。

(高田)



第39図 開発範囲と調査区 (S=1/5,000)



第17図版 調査区全景（空中撮影）

金井戸新田遺跡

目 次

第40図	周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)	46
第41図	調査区・トレンチ配置図 (S=1/5,000)	47
第42図	遺構配置図 (S=1/300)	48
第43図	溝-1出土遺物 (S=1/4)	49
第44図	H-1平・断面図 (S=1/80)	49
第45図	H-1出土遺物 (S=1/4)	50
第46図	H-2平・断面図 (S=1/80)	50
第47図	H-2出土遺物 (S=1/4)	51
第48図	H-3平・断面図 (S=1/80)	51
第49図	H-3出土遺物 (S=1/4)	52
第50図	H-4平・断面図 (S=1/80)	52
第51図	H-4出土遺物 (S=1/4)	53
第52図	H-5平・断面図 (S=1/80)	54
第53図	H-5出土遺物 (S=1/2, 1/4)	54
第54図	H-6平・断面図 (S=1/80)	55
第55図	H-6出土遺物 (S=1/4)	56
第56図	建物-1平・断面図 (S=1/80)	56
第57図	建物-1出土遺物 (S=1/4)	57

図 版 目 次

第18図版	1 調査区全景 (西から)	58
	2 H-1 (東から)	58
第19図版	1 H-3 (東から)	59
	2 H-3 壁体溝内式蓋口縁部出土状況	59
第20図版	1 H-4 (南から)	60
	2 H-5 (南から)	60
第21図版	1 H-6 (南から)	61
	2 建物-1 (西から)	61
第22図版	1 H-4出土土器1底部内面の焦げ付き	62
	2 H-6中央穴出土壺形土器	62

第1章 調査の経緯

1. 調査にいたる経緯

平成4年4月岡山県立大学教員宿舎の建設が総社市総社字新田1629-1外3筆に計画された。この事業に伴う文化財調査は本来岡山県教育委員会が担当すべきものであるが、大学建設地内の発掘調査が終盤を迎えて多忙のため対応がはかれず、総社市教育委員会に対応を要請されたものである。そこで総社市教育委員会では5月14日、重機によって掘削し、確認調査をおこなった。その結果予定地の西半分に集落遺跡の存在が確認された。東半分については約2～3mおきに計6本のトレンチを設定して確認調査をおこなったが、表土直下が砂礫層になっており、遺構は認められなかった。

以上の結果をもとに岡山県と協議を行い、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。

2. 調査の体制

発掘調査は高橋進一が担当し、平成4年5月25日から6月29日にかけて実施した。調査にあたっては岡山県総務部県立大学建設準備室、総社市総務部企画課の諸氏には種々の便宜を図っていただきました。記して厚く感謝の意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 平田 定士

主幹 村上 幸雄（調整担当）

係長 森田 忠志（庶務担当）

主任 荒木 泰行（庶務担当）

主任 谷山 雅彦（調査担当）

主任 高田 明人（調査担当）

主事 武田 恭彰（調査担当）

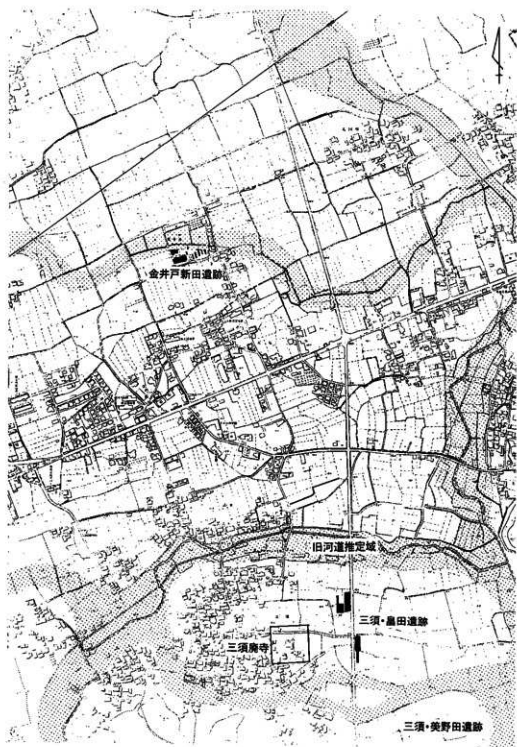
主事 前角 和夫（調査担当）

主事 高橋 進一（調査担当）

作業員 大村 努 岡 治生 小池 克己 中島 勝己 林 智恵子 林 幸

松本 和子

整理作業員 西平 登代子



第40図 周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

第2章 歴史的・地理的環境

岡山県の南西部に位置する総社市は、吉備高原の末端に位置しており、市街地は高梁川東岸に広がる沖積平野に形成されている。市内には全国第9位の墳丘規模をもつ作山古墳、それに続く吉備の盟主墳と推定されるこもり塚古墳・江崎古墳などをはじめとして数多くの古墳がのこされている。またそれに先行して古墳発生の礎をにぎる宮山墳墓群、後続して備中国分寺・尼寺など日本の古代史を考える上で重要な多くの遺跡が知られている。

金井戸新田遺跡は総社市街地の北東、国道180号線の北約400mに位置している。周辺にはまだ田畑が多く残っているが、急速に市街地化が進行してきている。特に本遺跡周辺では大型の駐車場を備えた大規模小売店舗の建設、県立大学建設に伴う学生アパート・マンション等の建設、また農免道路の国道昇格に伴って道路の拡幅及び沿道への各種店舗の建設が相次いでおり、数年前の田園風景を一変させている。

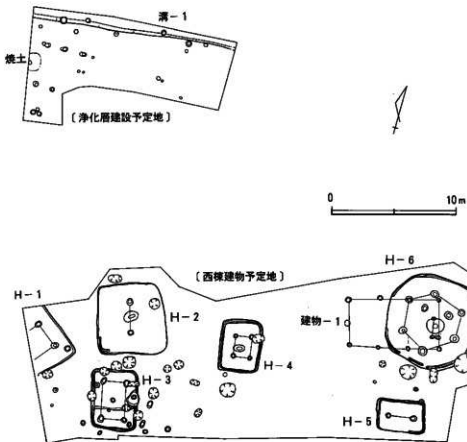
当地はかつて高梁川が複雑に流路を変えながら蛇行していたと推定され、旧河道と微高地が入り組んで存在していたと考えられる。この肥沃な沖積平野では近年の発掘調査の成果により



第41図 調査区・トレンチ配置図 (S=1/5,000)

縄文時代の晩期には既に稲作が開始されていることが明らかになりつつある。また弥生時代前期前半には、朝鮮半島の装身具の影響を受けていると考えられる小型細身の管玉が日本国内でもいち早く製作技術を伴って受容されていることも特筆される。

本遺跡は伝備中国府推定域内であり、東約1kmには栢寺廃寺がある。また近年、東約2kmでは南溝手遺跡・窪木遺跡・窪木薬師遺跡が、南約1kmでは三須島田遺跡・河原遺跡などが発掘調査されている。



第42図 遺構配置図 (S=1/300)

第3章 発掘調査の概要

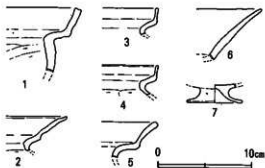
本遺跡は旧高梁川の分流によって形成された微高地上に形成された集落遺跡である。重機によって耕作土を除去した面ですぐに基盤層となっており、西端のH-1から順に東へ向けて調査を開始した。

〔浄化槽建設予定地〕

調査区の西端で焼土面と炭化物の分布が検出された。時期・性格は不明である。その他はまとまりを持たない柱穴と、調査区北端に溝-1が検出されている。

溝-1

調査区北端を東西方向に走っている。少量の土器片が出土しているのみである。



(第43図)

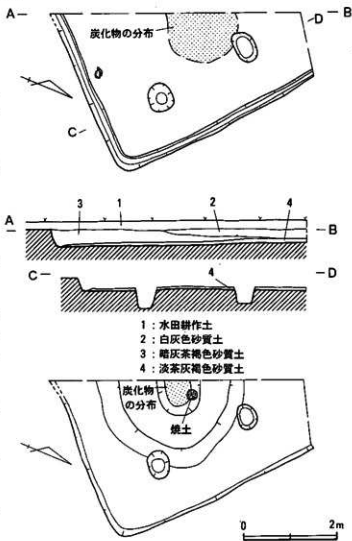
第43図 溝-1 出土遺物 (S=1/4)

〔西棟建設予定地〕

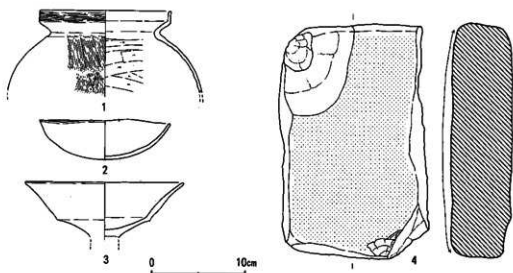
竪穴住居H-1 (第44図)

調査区の西端に位置している。1/3強が検出された。残りの部分は建設予定地外のため未調査である。柱穴が2個確認され、4本柱と考えられる。規模は不詳であるが、一辺約5mの方形の住居址と推定される。拡張は認められなかったが、約5~7cmの厚さで貼り床が認められ、中央付近にはうすく炭化物の分布が認められた。下層の床面の中央付近には被熱面が認められ、周囲が少し盛り上がっていた。いずれの床面もよくしまっており、遺存状態は非常に良好であった。

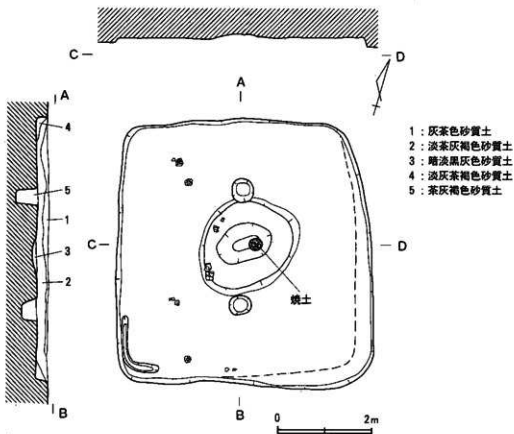
遺物は、上層の床面に接して(1)の約1/4個体の破片が検出されており、また住居址の埋土中から(4)の台石が出土している。



第44図 H-1 平・断面図 (S=1/80)

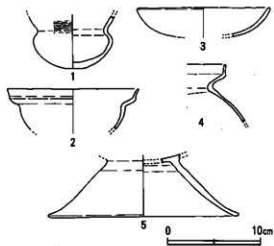


第45圖 H-1 出土遺物 (S=1/4)



- 1 : 灰茶色砂質土
- 2 : 淡茶灰褐色砂質土
- 3 : 暗淡黑灰色砂質土
- 4 : 淡灰茶褐色砂質土
- 5 : 茶灰褐色砂質土

第46圖 H-2 平・断面圖 (S=1/80)



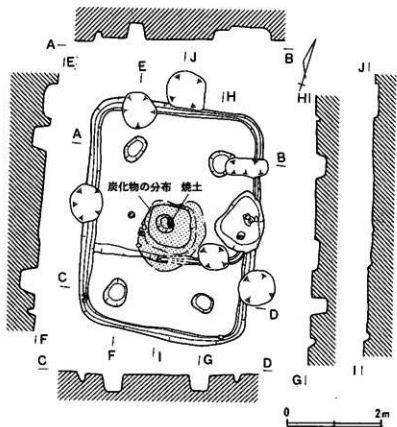
第47図 H-2 出土遺物 (S=1/4)

熱面が認められ、淡赤色に焼けていた。埋土の上も硬く締まっており、住居の使用途中で埋められたと考えられる。

竪穴住居H-2 (第45図)

調査区の西よりに位置しており、3号住居址と南北に並んで検出された。隅丸方形の平面形を呈しており、一辺約5～5.5mを測る。埋土中からは土器片がやや多く出土している。中央穴の両脇に柱穴が検出され、二本柱の住居址であることが明らかになった。床面の中央付近は貼床をして硬くしまっているが、周辺はあまり硬くなっていなかった。

中央穴はやや浅く広めであり、周囲が少し高く盛り上がっていた。内面には被

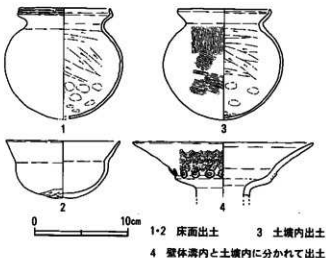


第48図 H-3 平・断面図 (S=1/80)

竪穴住居H-3 (第47図)

2号住居址の南に位置している。検出時に住居址壁内面が被熱によって赤変しているのが認められ、焼失住居であることが予測された。特に住居址の南西角を中心によく焼けており、壁面ぞいに焼土塊が分布しているのが認められた。

四本柱を持ち隅丸長方形の平面形を呈している。規模は約3.8×5mを測る。南半約1/3は5cm程度高くなっており、ベット状遺構



第49図 H-3出土遺物 (S=1/4)

を備えている。上半部がかなり削平されており、床面までの深さは5~10cm程度であった。床面は比較的良好に締まっており、ベット状遺構の上は特によく締まって硬い。壁体溝は床面から深さ約10~15cmと深く、内部には焼土片を多く含んだ土が堆積していた。またベット状遺構に伴って壁体溝状の溝が一部通っていた。

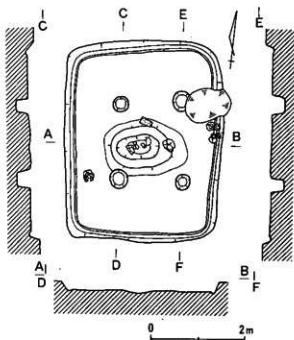
中央穴は径約35cmで、比較的浅く、内部によく焼けた被熱面があった。周囲は硬く、盛り上がっており、広く炭化物の分布が認められた。

遺物は床面上からはほぼ完形の埴(2)が、壁体溝内からは庄内式の壺の口縁部(4)が出土している。

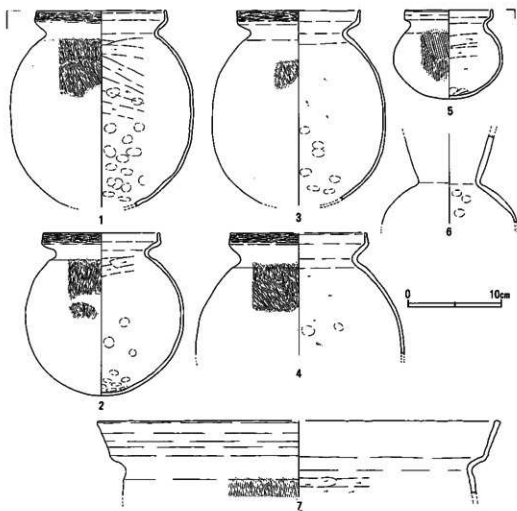
東壁ほぼ中央の一部を切って土壌が掘り込まれており、内部からは完形に近い甕(3)等が出土した。またこの中に壁体溝内から出土した(4)に接合する破片が含まれていた。

竪穴住居H-4 (第49図)

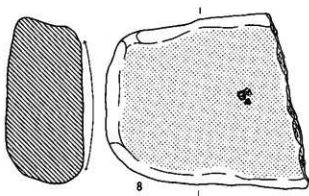
調査区ほぼ中央に位置している。隅丸長方形を呈しており、四本柱



第50図 H-4平・断面図 (S=1/80)



1~3-8 床面出土
4~7 埋土中出土

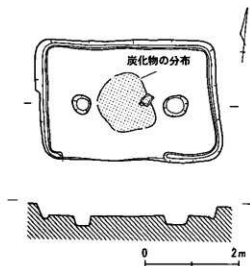


第51圖 H-4 出土遺物 (S=1/4)

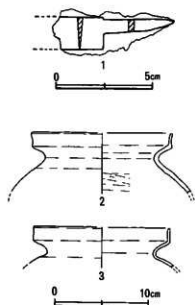
の住居址である。規模は3.5×4.2mを測る。

完形品に近い土器が多く出土している。東壁沿いでは壺・高坏等がひとかたまりとなって出土しており、壁の崩れと推定される。

中央に土器片の入った中央穴があり、周囲はやや高く盛り上がっている。中央穴の脇から台石が出土している。



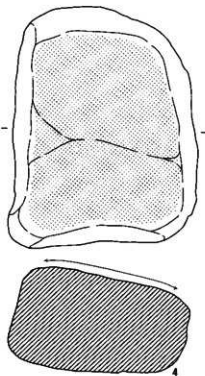
第52図 H-5 平・断面図 (S=1/80)

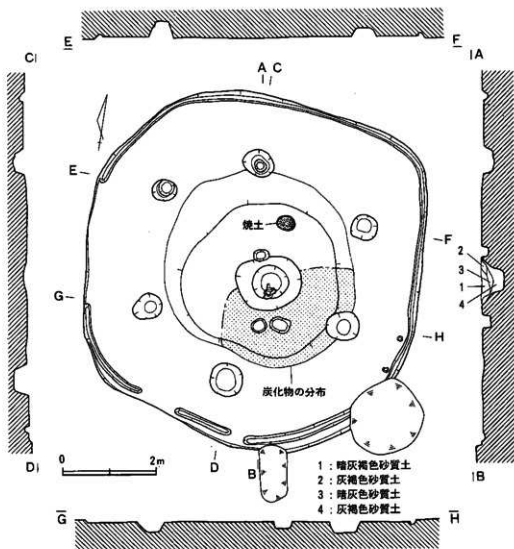


第53図 H-5 出土遺物 (鉄器 S=1/2, 土器・石器 S=1/4)

竪穴住居H-5 (第51図)

調査区東南角近くに位置している。小型の住居址であり、約2.6×4.0mを測る。平面形は隅丸長方形を呈しており、2本柱である。床面は比較的良好に締まっており、特に中央は硬く、少し盛り上がっている。また床面から鉄製の刀子破片(1)が出土しており、中央付近には台石(4)が置かれていた。





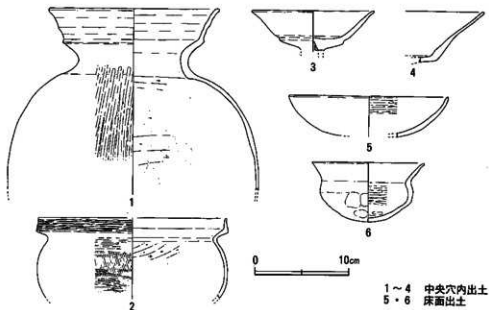
第54図 H-6平・断面図 (S=1/80)

竪穴住居H-6 (第53図)

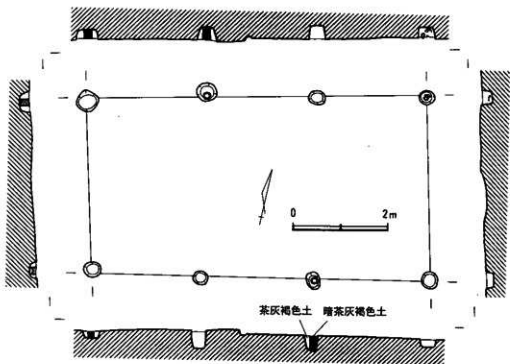
調査区東端に位置しており、本遺跡最大の住居址である。平面形は不整な六角形を呈しており、径7.2~8.1mを測る。6本柱であり、柱間は2.3~2.8mである。

中央に径約1.1~2.8mを測る不整円形の大きな中央穴があり、内部から壺の上半部(1)が出土している。両脇にはやや小さな柱穴がある。中央穴の周囲は硬く締まって盛り上がっており、被熱面・炭化物の分布が認められた。

また東側の壁体溝脇の床面から完形に近い壺と埴が出土している。



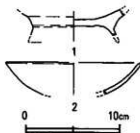
第55图 H-6出土遺物 (S=1/4)



第56图 建物-1平・断面图 (S=1/80)

建物-1 (第55図)

6号住居址と一部重複して建てられている1×3間の側柱建物である。柱間は約3.6×2.4mを測る。北東角の柱穴から土師質土器碗が出土しており、年代は12世紀第3四半期と考えられる。



第57図 建物-1 出土遺物
(S=1/4)

まとめにかえて

今回の調査では、東西方向に流路を持つと推定される旧河道の南に接する微高地末端に位置している古墳時代初頭の集落遺跡の一端が明らかになった。本遺跡の北～東にかけては耕作土直下から砂礫層が堆積しており、遺構は認められなかった。現在の水田面も南西方向に向かって高くなっており、微高地及び集落遺跡本体は南西に広がっていると考えられる。

本遺跡の遺構は主なものとして、住居址6・建物1・溝1がある。遺構は現在の水田耕作土直下で検出されており、上部を削平されておりいづれも比較的浅い。溝-1に関しては微高地末端の斜面の可能性もある。

遺構の時期については建物-1が12世紀第3四半期に編年されるほかは、いずれも古墳時代初頭に編年されると考えられる。H-1～5の平面形は、ほぼ長方形を呈しており、二本柱のものと四本柱のものが認められる。H-6は6本柱の六角形の住居址で大きな中央穴を持っている。他の住居址に比べ大型であり、用途、性格の差を感じさせる。いずれの住居址もほぼ同時期の土器を出土しており、近接した時期に営まれている可能性も考えられる。(高橋)



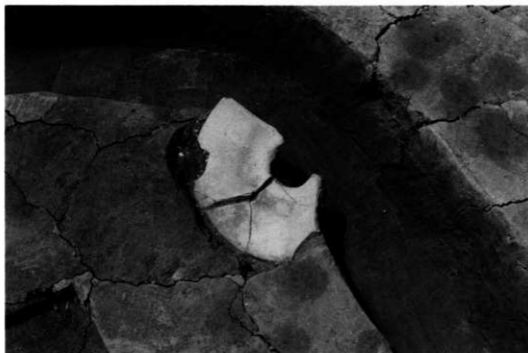
1. 調査区全景（西から）



2. H-1（東から）



1. H-3 (東から)



2. H-3 壁体溝庄内式壺口縁部出土状況



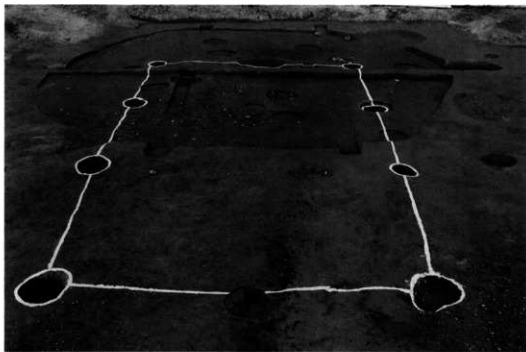
1. H-4 (南から)



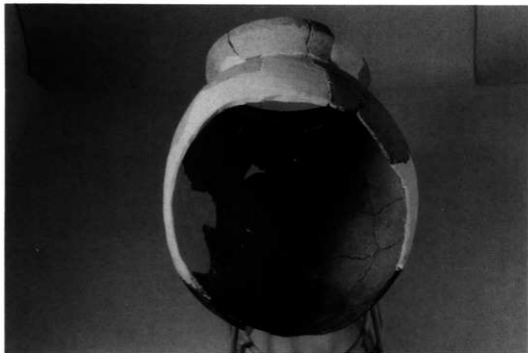
2. H-5 (南から)



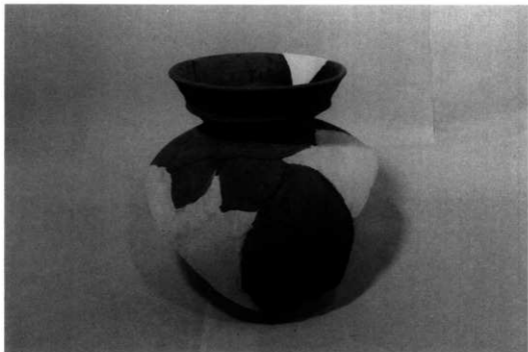
1. H-6 (南から)



2. 建物-1 (西から)



1. H-4 出土土器 1 底部内面の焦げ付き



2. H-6 中央穴出土壺形土器

総社市埋蔵文化財調査年報 3

1994年 3 月 印刷

1994年 3 月 発行

編集発行 **総社市教育委員会**
総社市中央一丁目1番1号

印刷 **柳本印刷株式会社**
総社市総社一丁目10番24号

